

第15回日本古典文学学術賞選考講評

葛西太一氏『日本書紀段階編修論—文体・注記・語法からみた多様性と多層性—』
(花鳥社、2021年2月刊)

私たちが、曲がりなりにも古代のことがわかるのは、『古事記』と『日本書紀』が存在しているからだ。「日本」なる国号は、中華世界の東方に位置する地域のことを表すので、日の出の地のことをいう。だから、海東のすべての地域は、朝の国たる「朝鮮」とも、日の出の所「日本」とも呼び得るのである。国号としての「日本」を、唐が承認したのは、則天武后の時代であった。それは、大宝の遣唐使(702)の外交努力による成果である。ちなみに、この遣唐使の少録のひとりには、山上憶良もいた。つまり、日本なる国号の承認を得て、はじめて『日本書紀』が編纂されることになるのである。『日本書紀』の撰上は養老4年(720)であるから、この間、20年ということになる。大宝令により、天皇称号も規定され、ここに新生国家が出現したとってよい。その新生国家の朝賀儀の様子を『続日本紀』大宝元年(701)正月条は、生々と描いている。つまり、『日本書紀』は、日本を知るために最初に読むべき書物なのである。したがって、『日本書紀』は、その後千年に亘る国家の典範になるのであった。ために、『日本書紀』の講筵録、注釈は、汗牛充棟なのである。

葛西太一氏は、その大海に、コンピュータのデータ処理という船で漕ぎ出したのであった。本書を読む者の多くは、これまで漠然と巻ごとの記述法の差異に気づいていた。また、グループ分けについても、何度も試みられていたのである。この精度を一気に上げたのが、森博達氏の研究であった。各巻ごとの筆録者の中国語法、中国音への精通度を位置づけ、いわゆる α 群、 β 群を同定するに至ったのである(森博達『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店、1991年)。葛西氏は、森氏の研究を念頭に別の指標を立て、それをどうリンクさせるかを丁寧に追ひ、『日本書紀』研究に新しい一頁を加えたのであった。いわゆるクロス集計の手法である。

第一章 文体・句読の差異からみた日本書紀

- 第一節 〈句頭辞〉の使用
- 第二節 〈句末辞〉の使用
- 第三節 〈同字数句〉の連接
- 第四節 日本書紀区分論続紹

第二章 注記・表現の重複からみた日本書紀

- 第一節 神武紀冒頭部の位置付け
- 第二節 神武東征と二つの詔
- 第三節 日本武尊関係記事の構句と表現
- 第四節 「頼」字の古訓と解釈

- 第五節 訓注と被訓注語の係り受け
- 第三章 語法・表記の揺らぎからみた日本書紀
 - 第一節 助数詞「廻」の周辺
 - 第二節 語りの方法とその定型化
 - 第三節 壬申紀「虎着翼放之」の解釈
 - 第四節 上代文献における「河上」「川上」の語義と表記
 - 第五節 景行紀と豊後国風土記の漢語表現
- 終章 日本書紀段階編修論

以上の研究によって、天武紀の上下巻の文体の特徴や、「アマテラス」の呼称法の違い、加筆による体裁の整理、用語の統一などの実態を明らかにしたのである。今後の『日本書紀』研究は、本受賞作を抜きにしては、語られないと思う。

もちろん、難点がないわけではない。結論を急ぐあまり、文章が粗雑になっている部分がある。また、苦心の「表」による整理から、結論を導き出す場合、もう少し丁寧に説明すべきところも散見している。が、しかし。その緻密さと、結論のインパクトにおいて、やはり本書は光を放っている。いや、光を放ち続ける。

私は、葛西氏が、広い視野を持っていること、また、今後の研究を進めるにあたり重要だと思われる古代史の研究者にも、人的ネットワークを持っていることを知っている。虫の眼の研究で、大きな成果を上げたのだから、次は、鳥の眼の成果を期待したい、と思う。

海は、広いのだ――。

(文責 上野 誠)